

全日本中学校長会賞

「思いやり」の生命保険

兵庫県 白陵中学校 三学年

原田 悠生

私の母はとても心配性だ。「もし何かあったら困るやろ。」が口癖で、様々なことに前もって計画し、準備するよう私にも要求してくる。良く言えば計画的で慎重で、責任感のある人なのだが、神経質に思え、正直口うるさく煩わしい時があり、よく衝突していた。長めの外出の際は、出発前に必ず掃除を始める。帰ってからで良いのではと聞くと、「何かあつて無事に帰れなかった時、誰かに整理されていない家を見られるのは嫌。」らしい。出かける際の荷物は、もしもを想定して多くなる。母の想定するもしもが起きたことはあまりない。ある日、母が通帳や書類を集めてエンディングノートのようなものを作っているというので驚いた。「まだそんな年齢ではないだろう。」と言うと、「もしもの時に困らないでしょ。何かがあつたら、お金や保険やらまとめているからこれを見てな。」という会話をしたことを覚えている。遺影用の写真を準備しておこうと毎年父とお互いの写真を撮ったり、母がもし病気にかかったり、死んだらという話を笑いながらしてくる。母が明るく病気や死について言うのは不謹慎な気がして嫌だった。初めて保険の種類や仕組み、成り立ちや必要性を学んだが、母の考え方への私の感じ方が少し変わった。

家族がどんな生命保険に加入しているか聞くと、医療、死亡、介護、こども、年金と種類が多かった。また掛け金の結構な額に驚き、「高いなあ、必要なんだろうけれど健康なら返ってこないお金、起こるかどうかわからないのにこんなに支払うのはもったいない気がする。」と言うと、「自分は大丈夫とは思ったらダメよ。万が一の時は本当に助かるよ。でもほんまに高いなあ。」と母は笑っていた。最近母は病気で手術や入院をしたが、その際に生命保険の給付を受けたらしい。「あなたも一回ほど生命保険のお世話になったことあるよ。」と言われ、若い私がそんな万が一になって当面は直面しないだろうと思いついていたので驚き、生命保険に興味を湧いた。

両親は私が誕生してすぐに私の将来のための学資と医療が一緒になったことも保険に加入してくれた。この保険は、私の教育資金の備えのため、親のもしもの時、その後の掛け金は支払い免除になるものだ。生まれてすぐ、私の将来を考えてくれたことが嬉しかった。私は一歳前後に二度、手術、入院をしたそう。乳児の入院の場合、親などが病室に泊まり込んで世話をする付き添い入院が一般的で、急だったため、何の準備もできず大変困ったそう。父は仕事で忙しく頻繁には

第63回中学生作文コンクール

病院に顔を出せず、祖父母も県外で遠方なうえ、当時は曾祖父母の介護のため頼れず、母は一日中私と病院にいて帰宅も外出もできなかった。幼くよく泣くため、設備の整った個室に入り、食事や日用品は院内の移動販売を利用していただろう。個室の差額代や食料費等は結構要るだろうと思ったが、保険に加入していたので、費用を気にせず安心して私の世話に専念できたらしい。もし保険がなかったら、ただでさえ子供のことが心配なお金のことも気にしていたらもっと不安だったと思うと言っていた。生命保険が身近なものに感じた。

生命保険に入った理由を聞くと、「自分と家族のためだよ。万が一のことがあっても、あなたに我慢をさせたり、将来を諦めさせたくない。病気になるたら気兼ねなく安心して治したいし、老後は家族に金銭等で迷惑をかけたくないからだよ。」と答えてくれた。万が一に備える生命保険は大切な人への思いやりであると思った。煩わしさを感じていた母の心配性も、私への思いやり故なのだろうと思い少々行き過ぎのところがあるけれど、少しは耳を傾け、適度に見習っていかうかと考えた。私は数年後には自分の行動に責任を持つ成人となる。その時は将来設計や備えをしっかりと行なうて、私も大切な人を思いやり、守りたいと思った。「備えあれば憂いなし」、生命保険はまさにそれだと思う。